

Oracle9i for Windows

リリース・ノート追加情報

リリース 2 (9.2.0.1.0)

2003 年 1 月

部品番号 : J06974-01

ORACLE®

Oracle9i for Windows リリース・ノート追加情報, リリース 2 (9.2.0.1.0)

部品番号 : J06974-01

原本名 : Oracle9i Release Notes Addendum, Release 2 (9.2.0.1.0) for Windows

原本部品番号 : B10076-01

Copyright © 2003, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されております。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	iii
------------	-----

1 Oracle9i for Windows リリース・ノート追加情報

OCOPY サイズ・オプションの指定	6
OTT マーカー・サポート用の OCCI デモ (mdemo1) の作成	6
Oracle Internet Directory	7
Oracle Internet Directory のアップグレード前の作業	7
Oracle Directory Manager	8
大容量メモリー (VLM) および DB_BLOCK_SIZE	9
セグメントまたは表領域で圧縮を使用しているかどうかの判別	9
セグメントと圧縮設定	9
表領域と圧縮設定	11
Real Application Clusters のインストール	11
更新の際の SYS.DUAL の使用	12
ojspc.bat スクリプトの修正	12
Microsoft のメモ帳を使用した STATSPACK ツールキット .sql ファイルの編集	12

はじめに

このドキュメントは、2002 年 7 月発行の部品番号 J06494-01 『Oracle9i for Windows リリース・ノート追加情報リリース 2 (9.2.0.1.0)』の更新版です。最初の項には 10 月に更新された情報が記載されています。それ以降の項には 7 月に発行された内容が記載されています。

この追加情報には、Oracle9i Database ドキュメント・ライブラリ CD-ROM、またはコンポーネント CD-ROM の %doc ディレクトリには含まれていない重要な最新情報が記載されています。

この追加情報に記載されている情報は、2002 年 10 月時点での最新情報です。現在の最新情報については、次の Web サイトでこのドキュメントの更新情報を参照してください。

<http://docs.oracle.com>

<http://otn.oracle.com/docs/index.htm>

Oracle9i for Windows リリース・ノート 追加情報

このリリース・ノートでは、次の項目について説明します。

- [OCOPY サイズ・オプションの指定](#)
- [OTT マーカー・サポート用の OCCI デモ \(mdemo1\) の作成](#)
- [Oracle Internet Directory](#)
- [大容量メモリー \(VLM\) および DB_BLOCK_SIZE](#)
- [セグメントまたは表領域で圧縮を使用しているかどうかの判別](#)
- [Real Application Clusters のインストール](#)
- [更新の際の SYS.DUAL の使用](#)
- [ojspc.bat スクリプトの修正](#)
- [Microsoft のメモ帳を使用した STATSPACK ツールキット .sql ファイルの編集](#)

OCOPY サイズ・オプションの指定

複数ディスク・コピー・モードで OCOPY size_1 および size_n オプションを使用すると、バックアップするファイルを OCOPY でどのように分割するかを指定できます。オプション size_1 では、最初の部分のサイズ（キロバイト単位）を指定します。オプション size_n では、残った部分のサイズを指定します。表 1-1 に OCOPY バックアップ構文を示します。コピーするファイルが大きすぎて 1 枚のディスクに格納できない場合は、OCOPY ユーティリティから、必要に応じて新しいディスクを挿入するように求められます。指定したサイズによって、分割された部分が 10 を超える場合、OCOPY はエラーを返します。

10MB のホット・ファイルを size_1=2048 および size_n=4096 と指定してバックアップする場合、ファイルは 2MB、4MB および 4MB の 3 つに分割されます。

表 1-1 複数ディスク・モードでのバックアップ構文

ファイル・タイプ	構文
FAT または NTFS ファイル	C:¥> ocopy /B old_file a: [size_1 [size_n]]
論理 RAW	C:¥> ocopy /B ¥¥.¥x: a: [size_1 [size_n]]
物理 RAW	C:¥> ocopy /B ¥.¥physicaldriven a: [size_1 [size_n]]

OTT マーカー・サポート用の OCCI デモ（mdemo1）の作成

make mdemo1 コマンドを使用して Object Type Translator（OTT）マーカー・サポート用の OCCI デモを作成するには、%ORACLE_HOME%\rdbms\demo\make.bat を更新する必要があります。

- 次の行を make.bat に追加してターゲット（ラベル）を指定します。
- 次の 4 行のターゲット（ラベル）およびルールを、make.bat の既存のターゲット・ブロックの後に追加します。

```
if (%1) == ("mdemo1") goto occiottmakeobj
if (%1) == (mdemo1) goto occiottmakeobj
if (%1) == ("MDEMO1") goto occiottmakeobj
if (%1) == (MDEMO1) goto occiottmakeobj

:occiottmakeobj
ott userid=scott/tiger intype=%1.typ outtype=%1.out.type code=cpp hfile=%1.h
  cppfile=%1o.cpp mapfile=%1m.cpp use_marker=true
cl -GX -DWIN32COMMON -I. -I%ORACLE_HOME%\oci¥include -I. -D_DLL -D_MT %1.cpp
  %1m.cpp %1o.cpp /link /LIBPATH:%ORACLE_HOME%\oci¥lib¥msvc oci.lib
  msvcr7.lib msvcprt.lib oraocci9.lib /nod:libc
goto end
```


Oracle Internet Directory

この項では、次の項目について説明します。

- [Oracle Internet Directory のアップグレード前の作業](#)
- [Oracle Directory Manager](#)

Oracle Internet Directory のアップグレード前の作業

Oracle Internet Directory リリース 9.2 にアップグレードする前に、Oracle Internet Directory リリース 2.1.1.0 および Oracle Internet Directory リリース 3.0.1.1（リリース 2.1.1.0 からアップグレードされている場合）に対して、次のアップグレード前の作業を実行する必要があります。Oracle Internet Directory リリース 3.0.1.1 が該当のノードに最初にインストールされた Oracle Internet Directory である場合、これらの手順を実行する必要はありません。

手順 2 および手順 4 を実行するには、Oracle Internet Directory Server が実行されている必要があります。

重要： 次のコードの行をコピーしてエディタに貼り付け、.ldif スクリプトを作成する場合、コードの長い行の末尾にある改行はすべて削除してください。削除しない場合、プロシージャは失敗します。

1. ファイル del.ldif を作成し、次の内容を挿入します（長い行に改行を使用しないでください）。

```
dn: cn=subschemasubentry
changetype:modify
delete:objectclasses
objectclasses:( 2.16.840.1.113730.3.2.2 NAME 'inetOrgPerson' SUP
organizationalPerson STRUCTURAL MAY ( audio $ businessCategory $ carLicense $
departmentNumber$ displayName $ employeeNumber $ employeeType $ givenName $
homePhone $ homePostalAddress $ initials $ jpegPhoto $ labeledURI $ mail $
manager $ mobile $ pager$ photo $ preferredLanguage $ roomNumber $ secretary $
uid $ userCertificate $ x500UniqueIdentifier $ userSMIMECertificate $
userPKCS12 ) )

dn: cn=subschemasubentry
changetype:modify
delete:attributetypes
attributetypes:( 2.16.840.1.113730.3.1.241 NAME 'displayName' DESC 'Preferred
Name of a person to be used when displaying entries' EQUALITY caseIgnoreMatch
SUBSTR caseIgnoreSubstringsMatch SYNTAX '1.3.6.1.4.1.1466.115.121.1.15'
SINGLE-VALUE )
```

2. `ldapmodify` を使用して `del.ldif` ファイルをロードします。 `my_host` および `my_port` は、必要に応じて別の名前に置き換えます。

```
ldapmodify -h my_host -p my_port -v -f del.ldif
```

3. ファイル `add.ldif` を作成し、次の内容を挿入します（長い行に改行を使用しないでください）。

```
dn: cn=subschemasubentry
changetype:modify
add:attributetypes
attributetypes:( 2.16.840.1.113730.3.1.241 NAME 'displayName' DESC 'Preferred
Name of a person to be used when displaying entries' EQUALITY caseIgnoreMatch
SUBSTR caseIgnoreSubstringsMatch SYNTAX 1.3.6.1.4.1.1466.115.121.1.15'
SINGLE-VALUE )
```

```
dn: cn=subschemasubentry
changetype:modify
add:objectclasses
objectclasses:( 2.16.840.1.113730.3.2.2 NAME 'inetOrgPerson' SUP
organizationalPerson STRUCTURAL MAY ( audio $ businessCategory $ carLicense $
departmentNumber$ displayName $ employeeNumber $ employeeType $ givenName $
homePhone $ homePostalAddress $ initials $ jpegPhoto $ labeledURI $ mail $
manager $ mobile $ pager$ photo $ preferredLanguage $ roomNumber $ secretary $
uid $ userCertificate $ x500UniqueIdentifier $ userSMIMECertificate $
userPKCS12 ) )
```

4. `ldapmodify` を使用して `add.ldif` ファイルをロードします。 `my_host` および `my_port` は、必要に応じて別の名前に置き換えます。

```
ldapmodify -h my_host -p my_port -v -f add.ldif
```

これらの手順を完了した後、『Oracle9i Database for Windows インストレーション・ガイド』の第2章「インストール前の要件」の Oracle Internet Directory の説明にあるアップグレード手順を実行します。

Oracle Directory Manager

問題： Windows XP で Oracle Directory Manager を起動すると、ディレクトリ・ツリー・ビュー・ペイン（ウィンドウの左側）が空のまま表示されます。

対処方法： 起動後、Oracle Directory Manager のウィンドウのサイズを若干変更してください。ウィンドウのサイズを変更すると、ツリー・ビューが表示されます。

大容量メモリー（VLM）および DB_BLOCK_SIZE

DB_BLOCK_SIZE 初期化パラメータの値が大きいと、デフォルトの AWE_WINDOW_MEMORY レジストリ値（1GB）では、データベースの起動に十分でない場合があります。LRU ラッチ数が高い構成に対して、メモリー不足を示すエラーが表示されます。通常、AWE_WINDOW_MEMORY レジストリ値を 20 パーセント増やします。

たとえば、DB_BLOCK_SIZE が 8KB、AWE_WINDOW_MEMORY が 1GB、LRU ラッチ数が 32（16 プロセッサ・コンピュータ）に設定されている場合、データベースの起動はメモリー不足エラー 27102 および 34 で失敗します。AWE_WINDOW_MEMORY 値を 1.2GB に増やすと、メモリー不足エラーは解消されます。

関連資料：『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の第 4 章「Windows 上の Oracle9i アーキテクチャ」の「VLM インスタンスのチューニング」を参照してください。

セグメントまたは表領域で圧縮を使用しているかどうかの判別

この項では、次のデータベース管理の項目について説明します。

- セグメントと圧縮設定
- 表領域と圧縮設定

セグメントと圧縮設定

圧縮を使用しているデータベース・セグメントを検出するには、データベースにユーザー SYS としてログオンし、次の create or replace view 文を使用してビュー all_segs を作成します。

```
SQL> create or replace view all_segs
      (owner, segment_name,
       partition_name, spare1
      as
select u.name, o.name, o.subname, s.spare1
from sys.user$ u, sys.obj$ o, sys.ts$ ts, sys.sys_objects so,
     sys.seg$ s, sys.file$ f
where s.file# = so.header_file
     and s.block# = so.header_block
     and s.ts# = so.ts_number
     and s.ts# = ts.ts#
     and s.ts# = so.object_id
     and o.owner# = u.user#
     and s.type# = so.object_type_id
     and s.ts# = f.ts#
     and s.file# = f.relfile#
union all
```

```

select u.name, un.name, NULLL, NULL
from sys.user$ u, sys.ts$ ts, sys.undo $ un, sys.seg$ s,
     sys.file$ f
where s.file# = un.file#
     and s.block# = un.block
     and s.ts# = un.ts#
     and s.ts# = ts.ts#
     and s.user# = u.user#
     and s.type# in (1, 10)
     and un.status$ != 1
     and un.ts# = f.ts#
     and un.file# = f.relfid#
union all
select u.name, to_char(f.file#) || '.' || to_char(s.block#), NULL, NULL
from sys.user$ u, sys.ts$ ts, sys.seg$ s, sys.file$ f
where s.ts# = ts.ts#
     and s.user# = u.user#
     and s.type# not in (1,5,6, 8, 10)
     and s.ts# = f.ts#
     and s.file# = f.relfid#
/

```

ビューの作成後、次の例に示すように、セグメントが現在圧縮されているかどうかを確認する問合せを、このビューに対して発行できます。

- セグメントが現在圧縮されているかどうかを判別するには、問合せで次の述語を列 `spare1` に適用します。

```
bitand(spare1, 2048) > 0
```

たとえば、セグメントが現在圧縮されているかどうかを確認するには、次のような文を発行します。

```
SQL> select * from all_segs where bitand(spare1,2048) > 0;
```

- セグメントに圧縮されたブロックが含まれているかどうかを判別するには、問合せで次の述語を適用します。

```
bitand(spare1, 4096) > 0
```

たとえば、圧縮されたブロックが含まれているセグメントを特定するには、次のような文を発行します。

```
SQL> select * from all_segs where bitand(spare1, 4096) > 0;
```

表領域と圧縮設定

表領域に対する圧縮設定を判別する場合、SYS としてログオンし、次の `create or replace view` 文を使用してビュー `compression_ts` を作成します。

```
SQL> create or replace view compression_ts (tablespace_name, flags) as select
ts.name, ts.flags from sys.ts$ ts where ts.online$ !=3;
```

ビューの作成後、次の例に示すように、表領域が現在 `DEFAULT COMPRESS` または `DEFAULT NOCOMPRESS` のどちらに設定されているかなど、表領域の圧縮状態を確認する問合せをこのビューに対して発行できます。

- 表領域が現在 `DEFAULT COMPRESS` に設定されているかどうかを判別するには、次の述語を使用します。

```
bitand(flags, 64) > 0
```

たとえば、現在 `DEFAULT COMPRESS` に設定されている表領域を特定するには、次のような文を発行します。

```
SQL> select * from compression_ts where bitand(flags, 64) > 0
```

- 表領域が現在 `DEFAULT NOCOMPRESS` に設定されているかどうかを判別するには、次の述語を使用します。

```
bitand(flags, 64) == 0
```

たとえば、現在 `DEFAULT NOCOMPRESS` に設定されている表領域を特定するには、次のような文を発行します。

```
SQL> select * from compression_ts where bitand(flags, 64) == 0;
```

Real Application Clusters のインストール

- 旧リリースの Real Application Clusters データベースの Oracle ホームがすでに存在するクラスタに、Oracle9i リリース 2 (9.2.0.1.0) の Real Application Clusters を初めてインストールする場合、インストール・インベントリがあるクラスタのノードから Oracle Universal Installer を実行する必要があります。これにより、ノード上のインストール・インベントリが、旧 Oracle ホームに関する情報と一致します。
- `clustca` と `gsdctl start` で JRE 例外が発生します。これは、Real Application Clusters を Windows NT にインストールする場合にかぎり発生する可能性のある問題です。この問題が発生したら、インストール・セッションを終了してください。クラスタの各ノードに移動し、`gsdservice -start` を実行します。これにより、OracleGSDService が作成され、起動されます。このサービスは、システム管理ツールで使用されます。

更新の際の SYS.DUAL の使用

今後のリリースでは、SYS.DUAL の表を更新 (SELECT FOR UPDATES を含む) に使用できません。SYS.DUAL を更新してアプリケーションの並行性制御を実行する必要がある場合は、かわりに dbmslock.sql を使用してください。SYS.DUAL は、検索には使用できます。

ojspc.bat スクリプトの修正

%ORACLE_HOME%\bin\ojspc.bat スクリプトでは、誤った場所にあるファイルが参照されます。このためスクリプトはただちに失敗します。修正するには、スクリプトの次の文を編集および変更します。

```
%ORACLE_HOME%\jsp\lib\servlet.jar
```

変更後は、次のようになります。

```
%ORACLE_HOME%\lib\servlet.jar
```

編集を保存して終了すると、スクリプトが適切に動作するようになります。

Microsoft のメモ帳を使用した STATSPACK ツールキット .sql ファイルの編集

STATSPACK ツールキットの .sql ファイルの編集に、Microsoft のメモ帳を使用しないでください。これは、これらのファイルの一部が CR-LF 形式ではなく、UNIX テキスト・ファイルであるためです。UNIX テキスト・ファイルは、Microsoft のメモ帳で開くとその形式を維持できません。必要な場合は、Microsoft のワードパッドを使用すると形式を失うことなく編集できます。